

総合コメント

—近代を対象とする歴史地理学研究の課題—

平 岡 昭 利

I. はじめに

「近代の歴史地理・再考」という大きなテーマ、それに加え広範囲な6つの報告の総合コメントは至難のわざと言え、とりあえず報告を2つのグループにまとめてコメントした。一つ目のグループは河野報告の近代の歴史地理学の研究動向から始まり、近代の国土・都市を中心とした空間組織化に言及した阿部報告、日本経済史の立場から、歴史地理学と社会経済史学の関わりについて論じた鷺崎報告である。二つ目のグループは、現象学的方法から場所の地域像に迫ろうとした大城報告、近代という時代と場所の意味を問う米家報告、さらに鳥瞰図から場所を読み解く関戸報告である。

II. 地理的事象の解明における近代歴史地理学の有効性

近代を対象とする歴史地理学研究は、河野報告によると、1980年代以降、一層盛んになっているという。近代という時代について筆者は、「近世—近代連続性」という議論があるのを承知のうえで、研究をもっと現代よりも比重をかけるべきと主張した。それは近世から近代初頭の約300年間安定的であった地域構造において、明治後半から全国規模での急激な構造的変動が生じた結果、現在の地域像の基礎が形成されたと考えるからであり、阿部報告もこの変革期以降、国土の編成が急激に進展したことを示した。このように考える

ならば、現在の地域像の解明には、近代、とくに後期からの歴史地理学的なアプローチが必須と考える。

さらに、その考察にはポリティクスや人間集団の行為への理解が必要となる。かつて『近代の歴史地理』¹⁾の巻頭論文で黒崎晴は、近代の歴史研究の視座として5つの課題を掲げたが、その多くが「どのように変化してきたか」を問うものであり、事象の本質的な理解、理由を追究するものではなかったように思われる。

科学的論考では事象の説明には理由が必要である。「なぜ工場地帯が形成されたのか」、「どうしてリンゴ畑になったのか」など“Why”が研究に必須であり、それをふまえた地理的事象の本質的な解明が、近代の歴史地理学研究に課せられていると考える²⁾。

III. 実証を裏づけるパースペクティブの重要性

地理学は歴史地理学を含めて、実証を非常に重んじてきた。近代を対象にした歴史地理学研究においても、人口や土地利用をはじめ、統計を使用した荷車や人力車、水車数などの復原研究など、とにかく細かな実証を中心に行ってきたが、この詳細な実証の先には何があるのだろうかと不安になる。鷺崎や矢ヶ崎の指摘「マクロから見る」ということは、分析のミクロ、マクロというスケールの問題ではなく、マクロ＝パースペクティブがあるかどうかを示唆されたものと理解する。

実証研究には意図があるのであり、意図の

ない研究は無意味に近い。地理学には地域的個性の把握という考えもあるが、地域的な差異を認識しただけでは問題の解決にはならない。たとえば自殺率は〇〇県が第1位、第2位は…、と数字を挙げることは興味深いが、自殺問題の解決に至るような本質の把握や証明には、直接結びつかない。これはコメの生産が、△△県に多いというのと同じである。実証することで地域差を求めらば、森川もコメントで指摘したように「その理由」が必要である。

なお、学際的な研究者をとりあげた鷺崎には、社会経済史学会の創設期に、飯塚浩二や小原敬士など多くの地理学者が参画し、同学会に大きな影響を与えたことを想起し、是非これらの地理学者についての再評価も願いたい。

IV. 認識主体の違いの克服は可能か

もう一つのグループの報告について、筆者は、端的に言えば、この研究方向の趣旨は理解できるが、方法論がわからない。いわゆる個別実証的な地理学に対して、この種の研究においては、「場所」は物量の多寡から捉えられるものではなく、生きている人間がそれをどのように認識し、生活、再生産をしてきたのか、という点から把握することが重視される。したがって、それが主体的な認識から普遍化に迫ろうとする研究であるということは理解できる。

しかし、それでも素朴な疑問を述べることにしたい。それは中西もコメントで指摘したが、研究対象への認識が認識主体によって大きく相違するということである。例えば大都市の底辺で働く労働者やホームレスと、社会階層が高い富裕層とでは、大都市への認識は全く異なるものとなろう。その場合、それぞれが大都市を表象しているとするならば、認識のあり方は千差万別となろう。この問題を報告者諸氏はどのように考えるのか、克服する方法はあるのかと私は思う。

また、矢ヶ崎がコメントでも触れたが、認識論的問題として個々の研究対象地域の空間スケールの問題、さらに時代、時間の問題を整理することが重要であると考えられる。また、モダンという言葉も、その意味が時代を示す時間的概念なのか、人間によって個々に認識、経験されたモダンなのか、きちんと概念の適用を決めて研究を進めないと焦点が曖昧になると懸念される。

なお、当日の総合コメントの中で、私はつぎのような質問を行った。それは、コメントの前半で私が批判した実証的な地理学には、これまで膨大な研究成果があるが、これらの研究と二つ目のグループに当たる認識論的アプローチによる研究とは、どのように関係しているのか。視点も方法も違う両者にあるいは関係性がないものと考えべきなのか、要するに認識論による研究は、これまでの研究とは一線を画して断絶するものか、あるいは方法の違いを克服し進められるものなのかといった内容であった。

以上、6つの報告を2つの方向に集約して総合コメントを述べた。

(下関市立大学)

〔注〕

- 1) 歴史地理学会編『近代の歴史地理 歴史地理学紀要25』歴史地理学会、1983。
- 2) 筆者は地理的解釈を行う場合、行為論的なアプローチが極めて有効と考えて以下の考察を行っており、参考にいただければと思う。
平岡昭利「南鳥島の領有と経営—アホウドリから鳥糞・リン鉱へ」歴史地理学45-4、2003、1-14頁。
平岡昭利「明治期における尖閣列島への日本人の進出と古賀辰四郎」人文地理57-5、2005、45-60頁。
平岡昭利「アホウドリと「帝国」日本の拡大」地理空間1-1、2008、53-70頁。
平岡昭利「東沙島への日本人の進出と西澤島事件」地理空間4-1、2011、1-17頁。